

# 社 会 科

坂井 宏行

上谷 知未

水橋 長之

## 1. ESDの取り組みにあたって

2008年の中央教育課程審議会答申で、社会科、地理歴史科、公民科の改善の基本方針として「持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成する」ことが明記された。このことにより、中学校社会科の公民的分野における「よりよい社会を目指して」では、中学校3年間の社会科のまとめとして、「持続可能な社会を形成するという観点から、私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題を探究させ、自分の考えをまとめさせる」という学習活動が設定されている。このように、ESDの視点が明確に盛り込まれている教科の1つが社会科である。

これまで社会科で取り扱ってきた人権、環境、平和などの教材（人、事物、現象、課題など）は、それ自体がESDに関連するものである。ESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度についても、現行の学習指導要領及び解説書から読み取ることができ、社会科とESDが求めている能力・態度は概ね一致している。したがって、これまでの学習指導の中で、ESDに関連する部分を明確に位置付けることによって、ESDの視点を重視した学習指導のねらいを達成することができると考える。

『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕（2012年 国立教育政策研究所）』によると、ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項の1つとして、教材を内容的、時間的、空間的に「つなげる」ことが挙げられている。ESDに関連した教材を多く扱う社会科は、各教科等と教材でつながるコアの1つとなる。ESDに取り組むにあたり、社会科には、教材の内容的な「つながり」を各教科等に分かりやすく示していく役割があると考えられる。そこで、社会科で取り扱う教材が、どのようなESDの構成概念を含んでいるのか、どのような分野（領域）に関わるものなのかを明らかにしていくことがとりわけ必要となる。

本校の社会科では、平成24、25年度の2か年間にわたり、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業の指定を受け、「多面的・多角的に考察する力を育む指導と評価」を主題に、思考力・判断力・表現力等を高める指導と評価について研究を行った。（『中等教育資料』平成26年6月号No.937参照）ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の1つに「多面的、総合的に考える力」がある。教科の特質上、この能力を身に付けさせる上で社会科が担う役割は大きく、本校では、昨年度までの研究成果を十分に生かすことができると考えている。ESDはこれまでとは全く異なる新しい学習ではないため、これまでの学習をよりESD的なものへと改良する姿勢が大切になりたい。

中学校社会科では、公民的資質の基礎を養い、よりよい社会をつくるために自らどうすべきかを考えられる生徒を育てることが求められている。そこでは、様々な条件や要因によって成り立ち、相互に関連し合っている現代の社会的事象をより深く理解するために、「多面的・多角的」な考察が必須の要件となる。ESDの視点に立った学習指導においても、「多面的・多角的」な考察の生徒への確実な定着を図るとともに、根拠に基づいた考察を促していきたいと考えている。特に、ESDが最終的に求めている「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決していく力」を身に付けさせるために、論理的に思考させることに加え、批判的に思考させることで代替案を出せる力を高めたい。

## 2 ESDと学習目標

### (1) 社会科で特に重視したい「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度のうち、社会科で特に重視したいものは、次の3つの能力である。

① 批判的に考える力      ③ 多面的、総合的に考える力      ④ コミュニケーションを行う力

### (2) 「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」と思考力・判断力・表現力等との関係

以上の3つの能力は、社会科で身に付けさせたい思考力・判断力・表現力等と概ね一致し、学習指導上切り離せない関係にある。その関係は、前年度までの本校社会科の研究からも、以下のように説明することができる。

社会的事象を多面的・多角的に考察することは、社会科特有の思考である。事象を複数の側面から捉えたり、複数の立場から捉えたりすることで比較や関連付けといった思考が促される。これらの思考が働くことで、事象がもっている「つながり・かかわり・ひろがり（システム）」に気付くことができ、総合的なものの見方や考え方が身に付いていく。事象のどの側面をどのような立場から捉えたかは、生徒によって異なる。他の生徒が思考・判断・表現した過程や結果を共有することは、新たな事象の側面やそれを捉える様々な立場、考え方があることに生徒が気づき、それらを獲得する機会となる。この点において、説明、要約、討論、論述といった言語活動と生徒一人ひとりのコミュニケーション力が必要不可欠である。一方、多面的・多角的に事象を捉えることができても、結論を導く根拠が客観性や妥当性を欠いたものであると、社会科及びESDの目標にある「公正に判断する」ことができたとはいえない。ものごとを批判的に（建設的、協調的、代替的に）考え、自分の意見や考えを発信し、合意を形成していくためには、根拠に基づいた論理的な思考がどうしても必要となる。『中等教育資料』（平成26年6月号 No. 937）参照

### (3) ESDと社会科の目標との関連について

学習指導要領及び解説書にある、社会科の各分野における目標や指導要領改訂の要点からESDに関連した記載を読み取ることができ、社会科とESDの目標は概ね一致することが分かる。その中でも、「地域的特色や地域の課題をとらえさせる（地理的分野）」、「社会の諸問題に着目させ、自ら考えようとする態度を育てる（公民的分野）」という記述を見ても分かるように、ESDが最終的に目指している「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決する」ことについて、その一部が教科自体の目標にすでに含まれている。以下は、ESDの視点に立った学習指導で身に付けさせるべき能力・態度が、学習指導要領及び解説書における各分野の目標及び指導要領改訂の要点のどこに読み取れるかを下線部で示したものである。なお、枠内は取り扱う内容を示している。

#### ① 批判的に考える力について

- ・「現代の社会的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」（公民的分野、地理的分野、歴史的分野）

#### ② 未来を予測して計画を立てる力について

- ・「それらの地域は相互に関係し合っていることや各地域の特色には地方的特殊性と一般的共通性があること、また、それらは諸条件の変化などに伴って変容していることを理解させる」（地理的分野）

### ③多面的、総合的に考える力、⑥つながりを尊重する態度について

- ・「広い視野に立って考えさせる、」（地理的分野、歴史的分野、公民的分野）
- ・「地域は相互に関係し合っていることや…、を理解させる」（地理的分野）
- ・「歴史の大きな流れ…を理解させ、」（歴史的分野）
- ・「我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせる」（歴史的分野）
- ・「民主政治の意義、国民の生活の向上と経済活動とのかかわり及び現代の社会生活などについて、個人と社会とのかかわりを中心に理解を深め、」（公民的分野）

### ④コミュニケーションを行う力について

- ・「習得した知識、概念や技能を活用して、社会的事象について考えたことを説明したり、自分の考えをまとめて論述したり、議論などを通して考えを深めたりすることを重視した」（社会科改訂の要点 公民的分野）
- ・「世界の様々な地域の調査や身近な地域の調査において、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動を充実させることとした」（社会科改訂の要点 地理的分野）

### ⑤他者と協力する態度について

- ・「他民族の文化、生活などに関心をもたせ、国際協調の精神を養う」（歴史的分野）
- ・「各国民が協力し合うことが重要であることを認識させる」（公民的分野）

### ⑦進んで参加する態度について

- ・「身近な地域の調査で、生徒が生活している地域の課題を見だし、地域社会の形成に参画してその発展に努力しようとする態度を養うようにした」（社会科改訂の要点 地理的分野）

## 3. 学習内容とつながり

### (1) 身に付けさせたい能力・態度からみた社会科で取り扱うESDに関する学習内容

社会科の各分野における目標や指導要領改訂の要点からみた場合、本校の研究で特に注目している①～③の能力を身に付けさせる内容として次のものが適していると考えられる。④のコミュニケーションを行う力については、言語活動の充実によって身に付けさせることになる。

#### ①批判的に考える力について

価値判断を伴う学習課題（論題）が適している。論題には3種類あり、「邪馬台国の位置は九州か近畿か」のような事実論題、「経済発展と環境保護のどちらが大切か」のような価値論題、「高速道路を無料にすべきか」といった政策論題に分かれる。一般的に、価値論題は議論がかみ合いにくいとされ、政策論題を批判的に考えることが授業での主流となっている。その際、議論レイアウトの1つであるトゥールミンモデルを用いることが有効であり、さらにどうしたらよいかを考えさせることが、批判的に考える力をつける上で大切である。具体的には、昨年度までの本校社会科の研究実践事例にある「EUは1つの国になるべきか」（地理的分野）や「参議院を廃止すべきか否か」（公民的分野）などのような政策論題が適していると考えられる。

#### ②未来を予測して計画を立てる力について

各地域の特色が、諸条件の変化などに伴って変容していることを理解させるという地理的分野の目標からすると、「世界の諸地域」や「日本の諸地域」において、その地域の課題と今後の展望について考察する学習が適していると考えられる。

#### ③多面的、総合的に考える力（⑥つながりを尊重する態度）について

各分野において、社会的事象の側面が複数あり、かつそれをとらえる立場が複数ある教材を用い

た学習が適していると考えられる。これに該当する教材あるいは単元は、昨年度までの本校社会科の研究を通して年間指導計画に明示してある。また、社会的事象がもっている、「つながり・かわり・ひろがり（システム）」をとらえやすいものとして、歴史的分野における「我が国の歴史の大きな流れ」を理解する学習（いわゆる時代を大観する学習）、地理的分野における「世界からみた日本のすがた」を理解させる学習、公民的分野における「グローバル化」、「国の政治のしくみ」、「消費・流通・生産・金融・労働などの経済のしくみ」など、社会的事象の結び付き、社会的事象のしくみやシステムについての学習が適していると考えられる。

## (2) 構成概念からみた社会科で取り扱う ESD に関する学習内容

『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕（2012年 国立教育政策研究所）』では、「持続可能な社会づくり」に関する上位概念として、「人を取り巻く環境（自然、文化、社会、経済など）に関する概念」と「人（集団・地域・社会・国など）の意思や行動に関する概念」に大別している。2つの上位概念は、いずれも社会科で扱う概念そのものであり、ESDの視点に立った学習指導で扱う内容は、社会科の学習内容そのものであると言える。

本校では、これらの上位概念を踏まえ、特に解決が喫緊の課題であり、教科等で内容的につながりのある分野（領域）として、「環境（気候変動、自然環境）、生物多様性、エネルギー・資源、防災・減災、文化遺産、国際理解、平和、人権、貧困」を設定し、これらに関わる学習内容を取り扱うことにした。社会科は、その全ての分野（領域）についていずれかの教科と内容的な「つながり」をもっている。

## (3) 各教科等とのつながりからみた社会科で取り扱う ESD に関する学習内容

本校のカリキュラムマップにも示されているように、各教科等と内容的な「つながり」がはっきりしているものとして、下記の表に示したような社会科の内容項目が挙げられる。これらにおいて、ESDの視点に立った学習指導を明確にして①③④の各能力の育成に努めるとともに、教材が、他の教科等や他の学年で扱われる教材ともつながっていることや、実生活や実社会ともつながっていることに気付き、それらについて関心や認識を持たせるようにしたい。さらに、各教科等と連携して、それらを相互に関連付けて見たり考えたりすることができるようにしていきたい。

社会科では、社会的事象を様々な立場から考察するが、生産者や消費者などの立場は、技術・家庭科でも扱うものである。教材の内容的な「つながり」以外にも、様々な立場での「つながり」を意識させることもESDには必要な視点であると考えられる。

なお、ESDの視点に立った学習指導における評価については、社会科の評価規準に照らし合わせながら行うものとする。

【表】各教科等と内容的な「つながり」のある社会科の教材例

社会科における内容項目	分野・学年	構成概念	領域や内容	関連教科等
世界の人々の生活と環境	地理的分野・1年	I 多様性	自然環境、 生活・文化	理科、 技術・家庭
近畿地方 (古都の成り立ちと保存)	地理的分野・2年	I 多様性 II 連携性	伝統文化 伝統文化の継承	国語、美術、 道徳
第二次世界大戦と日本	歴史的分野・3年	II 相互性 V 責任性	国際協調 平和の実現	国語、英語
わたしたちの生活と文化	公民的分野・3年	I 多様性 II 相互性	生活・文化 新たな文化の創造	国語、音楽、 美術、道徳

#### 4. 実践例 1 (1 学年)

##### 1 題材名 アフリカの課題と展望 (地理的分野)

##### 2 ねらい

アフリカ諸国が抱える課題から必要とされる支援について考察し、今後のアフリカの発展を展望する。

##### 3 学習活動

- ① 自然環境や産業等で見られるアフリカ州の特色について復習する。
- ② 現在アフリカ州が抱えている課題について知り、支援の必要性について理解する。
- ③ アフリカ州ではどのような支援が必要とされているかについて考察する。  
アフリカ州での様々な課題をデータとし、それに対してどのような改善案が考えられるかについてツールミンモデルを用いてまとめる。
- ④ それぞれの意見を発表し、共有する。
- ⑤ 発表された支援の内容を吟味し、今後のアフリカ州の自立に本当に必要な支援について再度考える。

本時では、アフリカ州の特徴からどのような課題があり、それに対してどのような支援が必要かを考察させることで、アフリカ州の自立に向けた国際協力の必要性について理解させることとした。その際、ツールミンモデルを取り入れたワークシートを用意し、既習のアフリカ州の課題 (D) から、アフリカ州の発展という未来像に迫るための解決方法 (W) を考えさせ、そのための支援 (C) をまとめさせた。また、先進工業国の 1 つとしての日本や自分たち一人一人になにができるかを考えさせる機会とした。

3 年の英語では、世界中でボランティア活動を行いながら発展途上国のための人材育成を支援する人物について学ぶ単元「What is the Most Important Thing to You」がある。国際協力の意義や私たち一人一人にできることなどについて、この単元でさらに考えを深めることができるよう、アフリカ諸国のような発展途上国のもつ課題とその解決に向けた展望について学習する場とした。

#### 4 ESD との関連

##### (1) 構成概念 V 連携性 VI 責任性

将来のアフリカ州の発展には当事国における自立への動きだけではなく、他国や NGO による連携・協力が必要であること (連携性)。また、そのために日本や自分自身がどのような役割を果たすことができるかを考えること (責任性)。

##### (2) 能力・態度

- ② 未来像を予測して計画を立てる力

##### (3) 題材のつながり

- ① ESD の関連分野 国際理解, 貧困
- ② 教科 英語
- ③ 題材 What is the Most Important Thing to You (3 年)

## 実践例2 (1学年)

### 1 題材名 低い土地にくらす人々 (地理的分野)

### 2 ねらい

バンコクの人々の生活について、気候等の自然的条件や、都市化等の社会的条件と関連付けて考察し、その特色について理解する。

### 3 学習活動

- ①バンコクの位置を地図帳で確認し、雨温図から気候の特色を読み取る。
- ②2011年のタイの大洪水について確認し、チャオプラヤ川の勾配についての資料から、洪水と気候の関係について理解する。
- ③写真から伝統的住居(高床)、衣服、食事の特色を読み取り、その特色が見られる理由について雨温図を基に考察する。
- ④バンコクで信仰されている仏教と人々の生活の関わりについて理解する。
- ⑤都市化したバンコクの写真から、人々の生活が変化してきたことを理解する。
- ⑥都市化による水田や森林の減少が洪水の被害を広げていることについて理解する。

本時では「バンコクの人々のくらし」という地理的事象がどのような特色をもっているのかについて学習した。特に自然的条件(気候、地形、自然災害)、社会的条件(宗教、都市化)から、多面的に社会的事象を捉えさせることを意識した。このような視点からの授業は本単元を通して行っており、温暖な土地のくらし、乾燥した土地のくらし、低い土地のくらしなど、様々な地域の人々の生活の特色を多面的に捉えるようにしてきた。これにより世界の気候や衣服、食事、住居等は地域によって様々であり、環境とくらしが密接に関わっているということをより深く理解できると考えた。

1年の技術・家庭科(家庭分野)では「食生活と自立」の単元で地域の食材や郷土料理、世界各地の食事について取り扱う。技術・家庭科における食事の多様性の理解を円滑に進めるために、本時や本単元の学習成果を生かせるように連携を図りたい。

### 4 ESDとの関連

#### (1) 構成概念 I 多様性

低い土地(バンコク)のくらしはその環境条件と密接に関連した特色がみられ、それらは世界の様々な地域によって異なるものである(多様性)。

#### (2) 能力・態度

- ③多面的、総合的に考える力

#### (3) 題材のつながり

- ①ESDの関連分野 国際理解、環境・自然
- ②教科 技術・家庭
- ③題材 「食生活と自立」(1年)

## 5. 実践例3 (2学年)

### 1 題材名 グローバル化が進む世界 (地理的分野)

### 2 ねらい

日本の貿易の特色とその変化について多面的・多角的に考察し、物流やものづくりの面での日本と世界との結び付きを理解する。

### 3 学習活動

- ①日用品から日本の貿易について関心をもつ。
- ②本時の学習課題を知る。
  - ・なぜ身の周りの工業製品に日本製のものが少ないのだろう。
  - ・また、日本製が少なくなっていることは何を意味しているのだろう。
- ③貿易の必要性を、国際分業の視点から理解する。
- ④日本の貿易の特色を、輸出入品目の変化、貿易相手地域の変化などの資料から読み取る。
- ⑤日本の貿易の特色が変化してきた理由とその意味を考え、学習課題についてまとめる。

授業の導入では、身近な工業製品とその生産国から世界と自分のくらしとのつながりに気付かせ、日本の貿易やものづくりに対する生徒の興味・関心を高めることをねらった。また、国際分業の考え方を理解することで、国と国とがつながる必要性に気付くようにした。

日本の貿易の変化については、輸出入品目の変化と輸出入相手地域の変化の2つ側面をグラフから読み取らせた。これまで、日本は加工貿易に依存してきた国であったが、今日では、機械を中心とした製品の輸入が増えている。また、貿易額は北アメリカにかわってアジアが6割近くを占めるようになってきている。これらの変化の背景や理由を、「アジア州」や「世界から見た日本の資源・エネルギーと産業」の各単元で習得した知識・理解を活用して多面的・多角的に考察させた。

貿易については、技術・家庭科(家庭分野)の「地域の食材と文化」(1年)、「商品選択と購入」(3年)の各単元で取り扱われている。環境に配慮した食生活の在り方について考える手立てとなるフードマイレージでは、食料の輸入先とその地理的位置の知識を活用するため、できれば家庭分野より先に本題材を履修させておきたい。フェアトレードでは、貿易構造についての知識・理解の定着を社会科で、公平な貿易の実現を目指そうとする態度・実践力の育成を家庭分野で担えるようにしていきたい。

### 4 ESDとの関連

#### (1) 構成概念 II 相互性

現代の世界では、交通や通信の発達によってグローバル化が急速に進み、人や物、サービスの国境を越えた移動が活発になっている。また、各国が自国の生産条件に見合った商品の生産を行い、その一部を輸出し、他の商品は外国から輸入する国際分業によって国の経済が成り立っている。

#### (2) 能力・態度 ③多面的、総合的に考える力 ⑥つながりを尊重する態度

#### (3) 題材のつながり

- ①ESDの関連分野 国際理解
- ②教科 技術・家庭
- ③題材 「地域の食材と食文化」(フードマイレージ)(1年)  
「商品選択と購入」(フェアトレード)(3年)

## 実践例4（2学年）

1 題材名（単元名） ヨーロッパ人との出会いと全国統一（歴史的分野）

2 ねらい

・ヨーロッパ人来航の背景とその影響，織田・豊臣による統一事業を通して，政治や社会に大きな変化がおこったことを多面的・多角的に考察し，近世社会の基礎がつけられたことを理解する。

3 学習活動

①単元の学習課題を知る。

- ・なぜ，16世紀の中ごろにキリスト教や鉄砲を伝えたのがスペインやポルトガルだったのか。
- ・鉄砲やキリスト教の伝来は，日本の社会にどのような影響をもたらしたのか。

11世紀から16世紀にかけてのヨーロッパ社会の動き（十字軍，ルネサンス，宗教改革）について知り，ザビエルが日本にキリスト教を伝えにきた背景について考える。

②ヨーロッパ人の海外進出の動きについて知り，ポルトガルがアジアの国と貿易をするようになった背景について考える。

③鉄砲の伝来が天下統一の動きを促進したことや，キリスト教の広がりや政治と切りはなせない問題になってきたことを理解する。

④⑤信長と秀吉による政治や社会の変化について理解する。

⑥桃山文化の特色を，当時の政治や社会の変化やヨーロッパの文化の影響などから理解する。

⑦単元の学習課題について自分の考えをまとめる。

本単元では，我が国と諸外国の歴史や文化の関わりを扱っており，ESDの視点にたった学習指導における「相互性」の概念があてはまる。単元の導入で，歴史的事象のつながりを考えさせる学習課題を設定し，それぞれの授業で学んだことを学習課題の解決に生かせるよう指導を工夫した。ヨーロッパ人の海外進出の授業では，南アメリカから大量の銀がヨーロッパに流入したことの意味や意義についてトゥールミンモデルを用いて考えさせ，16世紀以降の植民地化の主導権をヨーロッパの国々が握っていく見通しについても理解させた。

本単元で取り扱うルネサンス期には，学問，芸術，科学などの発達，人・物・貨幣の新たな移動が見られ，人物とその業績を中心に各教科と内容的につながる教材が多い。社会科で得た知識・理解を基に，各教科等で生徒の興味・関心をさらに高めたり，内容の理解を促したりできるよう，各教科等と連携して教材の選択や取り扱い方を考えていきたい。

4 ESDとの関連

(1) 構成概念 III 相互性

ヨーロッパ人の海外進出によるグローバル化がはじまり，日本が，中国や朝鮮以外にヨーロッパの国々の歴史や文化の影響を受けるようになり，政治や社会が大きく変化していった。

(2) 能力・態度 ③多面的，総合的に考える力

(3) 題材のつながり

①ESDの関連分野 国際理解 文化遺産

②教科 国語，理科，美術，技術・家庭

③題材 「きみは『最後の晩餐』をしっているか」（国語2年）

「地球と宇宙」（理科3年） ルネサンス期の絵画・彫刻の鑑賞（美術1～3年）

「地域の食材と食文化」（技術・家庭1年）



## 6. 実践例5 (3学年)

### 1 題材名 現代社会をみてみよう (公民的分野)

### 2 ねらい

スーパーマーケットなどの身近な生活に関わる社会的事象において、グローバル化、情報化、少子高齢化との関わりが見られることに気付くことができる。

### 3 学習活動

- ①日常生活と現代社会の関連について関心を持つ。
- ②現代社会の縮図として、スーパーマーケットのイラストから現代社会の様子を探る。
  - ・外国の調味料      ・輸入食材      ・外国人客
  - ・POSシステム      ・ATM
  - ・バリアフリー      ・少量パックの総菜      ・赤ちゃん休憩室      など
- ③グループ討議で、どのような関連があるか考える。
  - ・食生活におけるグローバル化
  - ・情報通信技術の発達による情報化
  - ・食品加工や施設設備に見られる少子高齢化
- ④それぞれのグループでの気づきを発表する。
- ⑤他のグループの発表を聞き、様々な見方があることを知る。

日常生活における消費活動の基本となるスーパーマーケットの様子から、現代社会の特徴を浮かびあがらせることで、現代社会への関心を高めることができる。また、日常の消費活動において、食生活のグローバル化や情報化など普段から体験している社会的事象を、現代社会の特徴として捉え直すことにより、「ひと・もの・こと」と関わりあって生活していることが実感として捉えることができる。

本時では、公民的分野へのアプローチ的な学習であり、一つの社会的事象を多面的、総合的に考える力の育成につながると考える。また、技術・家庭科の「よりよい食生活」とのつながりを想起させ、「消費者としての選択」のあり方などの課題へも広げることができると考える。

### 4 ESDとの関連

#### (1) 構成概念 II 相互性

現代社会は、互いに働き掛け合い、ものの移動が行われたり、情報が伝達・流通したりしている。

#### (2) 能力・態度

- ③多面的、総合的に考える力

#### (3) 題材のつながり

- ①ESDの関連分野 国際理解
- ②教科 技術・家庭
- ③題材 「よりよい食生活」(1年生)

## 実践例6 (3学年)

### 1 題材名 文化の多様性 (公民的分野)

### 2 ねらい

地域によって多様な文化が存在することに気付き、日本の中の外国文化など異なる文化を尊重し合うことの大切さを理解することができる。

### 3 学習活動

- ①ことばと表現方法，食生活のちがいから文化の多様性について関心を持つ。
- ②地域によって，衣食住などの生活文化の多様性が見られることを知る。
  - ・食文化の多様性の例として，出汁の東西文化の違い。
  - ・伝統文化の違いとして，雛人形などの違い。
  - ・住環境の違いとして畳の大きさの違い。
  - ・消費活動における多様性。
- ③身近に見られる多文化についてグループで考える。
  - ・外国語表記の案内板
  - ・お祭りなどにおける異文化交流
- ④それぞれのグループでの気づきを発表する。
- ⑤身近に外国文化など異なる文化が見られることを確認する。

伝統文化をはじめ，現代の文化については，生徒の生活体験から，一面的なものとして捉えられがちであり，自分たちとは異なる文化に対しての理解が不十分と思われる。本時においては，日本文化の多様性について，地理的要因，歴史的要因から地域によって，多種多様な発展が見られたことを考えさせる。

また，グローバル化による多文化社会が進展してきており，身近な地域においても町中で外国語表記の案内板が見られたり，外国の習慣が浸透していたりすることなど，多様な文化が身近に存在することに気付くとともに，異なる文化を尊重し合うことの大切さを理解させる。また，英語科の「伝統文化を説明しよう」の学習と連携することで，文化への理解の深まりが期待できる。

### 4 ESDとの関連

#### (1) 構成概念 I 多様性

文化は，自然環境や歴史的要因などから多種多様な発展が見られるとともに，今日では，グローバル化のなかでより多様化し，身近なものになってきている。

#### (2) 能力・態度

- ③多面的，総合的に考える力

#### (3) 題材のつながり

- ①ESDの関連分野 国際理解学習
- ②教科 英語
- ③題材 「伝統文化を説明しよう」(3年)

## 実践例 7 (2 学年)

### 2 年 1 組 社会科 学習指導案

平成 26 年 12 月 16 日 (火)

5 時間目 2-1 教室

指導者 上谷 知未

#### 1. 単元名 産業の発達と幕府政治の動き (歴史的分野)

#### 2. 目標

- ・社会の変動や欧米諸国の接近，幕府の政治改革，新しい学問・思想の動きなどを通して，幕府政治が次第に行き詰まりを見せたことを理解することができる。
- ・産業や交通の発達，教育の普及と文化の広がりなどを通して，町人文化が都市を中心に形成されたことや，各地方の生活文化が生まれたことを理解することができる。また，それらのことと現在との結び付きについて考えることができる。

#### 3. 評価の観点と規準

- ・近世の歴史的事象に対する関心を高め，意欲的に追究し，近世の文化遺産を尊重しようとすることができる。 【関心・意欲・態度】
- ・産業や交通の発達，社会の変動や欧米諸国の接近，幕府の政治改革，教育の普及と文化の広がり，新しい学問・思想の動きなどについて多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に判断している。 【思考・判断・表現】
- ・産業や交通の発達，社会の変動や欧米諸国の接近，幕府の政治改革，教育の普及と文化の広がり，新しい学問・思想の動きなどについて，年表や歴史地図，映像などの様々な資料を適切に選択して，読み取ったり図表などにまとめたりしている。 【資料活用の技能】
- ・町人文化が都市を中心に形成されたことや各地方の生活文化が生まれたこと，幕府政治が次第に行き詰まりをみせたことを理解し，その知識を身に付けている。 【知識・理解】

#### 4. 指導にあたって

##### (1) 教材観

これまで江戸幕府による政治改革についての学習は，財政立て直しの成否の面から取り扱うことが多く，なぜうまくいかないのかといった理由や背景等について踏み込んでいる実践は少なかった。そこで，江戸時代中期に行われた 2 つの財政再建政策を，武士・農民・商人の立場から多面的・多角的に捉えさせることで幕藩体制の矛盾や限界に気付かせ，幕府が滅亡に向かっていく必然性を生徒に理解させたいと考えた。また，財政再建は，現代の政治課題の 1 つである。支出削減と収入増加という 2 つの視点を与えて政治改革を生徒に考えさせておくことは，後に学習する公民的分野の「国民生活と福祉」の学習でその視点が活かせるようにしたい。幕府政治の動きについては，産業や交通の発達，欧米諸国との接触が深く関わっていることから，構成概念の「Ⅱ相互性」が該当すると考える。

町人文化が都市を中心に形成されたことや各地方の生活文化が生まれたことについては，代表的な事例を取り上げてそれらの特色を考えさせるようにし，網羅的な取扱いにならないようにす

る。その際、『こども金沢市史』（金沢市発行）にある資料等を活用することで、身近な地域の歴史に関心を持たせるとともに、当時の生活文化を具体的に理解させたい。江戸時代に発達した文化には、俳諧、歌舞伎、文楽、浮世絵、相撲などのように国語、音楽、美術、保健体育で取り扱われるもの、衣食住とその工夫のように技術・家庭、理科等で取り扱われるものがあり、授業では、各事象の基礎的・基本的な知識を身に付けさせる。歴史的な事象を扱うことから他教科の授業で、過去・現在・未来という時間的な教材の「つながり」を意識できるよう工夫したい。江戸時代の文化や産業については、様々な文学、芸能、学問の発達が見られたり、地方で様々な特産物が生産されたことから、構成概念の「I多様性」に該当すると考える。

## （2）生徒観・指導観

男子20名、女子19名の学級である。発言する生徒が固定してきているが、全体としては授業に真剣に取り組んでいる。社会的な思考力・判断力・表現力と論理的な思考力を身に付けさせるために、各単元で1つは、トゥールミンモデルを用いて多面的・多角的に考察する学習課題を設定している。

江戸時代は、徳川氏による政権が長期にわたった時代であるが、それを可能にしたシステムとその中の矛盾や限界を理解させ、単元の終末に、なぜ江戸幕府が滅んだのかを考察させたいと考える。また、そのことで、ESDが求める「多面的、総合的に考える力」を育成できると考える。

本単元で取り扱う、財政や学問・思想の用語や概念には、2年生にとって難しいものが多い。用語の意味を確認したり、分かりやすい言葉や事例を用いたりして、苦手意識を持つ生徒が意欲的に取り組めるよう配慮していきたい。

## 5. 指導計画（総時数7時間）

- 第1次 農業や諸産業の発達 (1)
- 第2次 都市の繁栄と元禄文化 (1)
- 第3次 享保の改革と社会の変化 (1)
- 第4次 幕府政治の改革 (1)
- 第5次 新しい学問と化政文化 (2)【本時】2/2
- 第6次 外国船の出現と天保の改革 (1)

## 6. 本時の学習（第5次中第2時）

(1) 題材名 「江戸のエコ社会」(教) p128

関連教材 「江戸からのメッセージ～今に生かしたい江戸の知恵～」杉浦日向子（1年国語）

(2) ねらい

近世の江戸の人々の生活を通して、過去にも持続可能な社会が形成されていたことに気付くことができる。また、エコ社会がどのようなものかを多面的に捉え、現代と江戸時代におけるエコ社会の在り方の違いについて考察することができる。

(3) 評価の観点と規準

現代と江戸時代のエコ社会の在り方の違いについて、低炭素、循環型、自然共生の3つの側面とそれらの関係性から説明することができる。

社会（思考・判断・表現）、ESD（多面的、総合的に考える力）



<p>5. 江戸時代にエコ社会が形成されていた背景について考える。</p> <p>6. 本時の学習課題について自分の考えをまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸時代と現代のエコ社会との違いは何かを、これら3つの側面と、ここまでの既習事項を結び付けて考察させる。</li> </ul> <p>【評価1】社会（思考・判断・表現）</p> <p>ESD（②多面的，総合的に考える力）</p> <p>二酸化炭素がほとんど排出されないこと，再生可能な資源を使用していたこと（形を変えて循環する資源），人間も自然も破壊されないこと，この側面が全て結びついていることを説明している。思考を促す手立てとして，エネルギー源や素材の特質の違いに目を向けさせる。</p> <p style="text-align: right;">（発言内容）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>なぜ，江戸時代はエコ社会の取り組みがさかんだったのかを，自然的条件と社会的条件（江戸幕府による支配体制）の2つの面から考えさせる。</li> <li>江戸時代の人々はエコを意識していたのかどうかについて考えさせる。</li> <li>現代の私たちが，江戸時代の人々の生活から，社会の在り方について学ぶべきところは何かについて，文章でまとめさせる。また，エコ社会を別の語句で置き換えさせる。</li> <li>自分の考えをワークシートにまとめる。</li> <li>数名の生徒に発表させる。</li> </ul> <p>【評価2】（ワークシート・発言内容）</p> <p>評価1の規準が盛り込まれている。</p> <p>持続可能な社会など。</p>	<p>13</p> <p>5</p> <p>7</p>
--	---	-----------------------------

(6) 実際の板書



(7) ワークシートの記載内容

①現代の私たちが、江戸時代の人々の生活から「社会の在り方」について学ぶべきところは何だろう。

江戸時代は1つのものをその本来の役目が終わっても別の利用方法で使い続けている姿があります。現在は、すぐに役目が果たせないと分かれるとゴミになってしまうことがあります。だから、1つの物でも他の角度から見て他の使用法がないかをすぐ生産ではなくて考えてみるのも学べると思いました。

②江戸の「エコ社会」を別の語句で言い換えると、

持続的可能な社会

①現代の私たちが、江戸時代の人々の生活から「社会の在り方」について学ぶべきところは何だろう。

現代社会は、様々な国との交流を持っていて、さかんに貿易をしているから、資源が少なくても豪華な生活ができています。けど、江戸時代は資源も少なく、技術も今より劣っていて、さらに鎖国をしていたからSRは生活を営む上で不可抗力だったと思います。だから、江戸時代の人々の生きる環境に不可をかける考えを見習えばいいと思います。

②江戸の「エコ社会」を別の語句で言い換えると、

持続可能な社会

①現代の私たちが、江戸時代の人々の生活から「社会の在り方」について学ぶべきところは何だろう。

江戸時代の日本は利便性を追求して大量生産・大量消費社会ではなく限りに資源を最大限に活かして経済を維持し文化を発展させた循環型社会であった。その理由は消費と生産が持ちつ持たれつ関係であったからだと思う。農作物を作る農家は肥料を使い、肥料を作るのはその農作物を食べる消費者だった。このように、互いに互いを支え合っていて、資源が循環する、究極のリサイクルの環が回っていたのだと思う。今の私達は食べ物や服を着たり、使い捨ての便利さに慣れ込んでいる。江戸のよいエコ社会を実現するには、もの裏にある資源や人々の努力に関心をもち、ものを大切にすることが重要だと私は考える。

②江戸の「エコ社会」を別の語句で言い換えると、

消費と生産が持ちつ持たれつ関係

(8) 授業後の調査より

①社会科と他教科との内容的なつながりについての記載

設問4 あなたは、社会科の学習内容のなかで、他教科の学習内容が深く関連していると意識したことはありますか。あてはまる符号に○をつけてください。また、「意識したことがある」という人は、どの教科の何という学習内容で活用したかも具体的に書いてください。

意識したことがある。                       意識したことがない。

江戸時代の生活や、地域の工場のなどの取り組みは、家庭の衣服のほとんど“きず”に捨てられているという中で、江戸時代の様々な社会について勉強したことにつながっていると思う。他にも、平家物語は国語で内容をくわしく習い、琵琶法師から語りつがれている。

設問5 設問4で「意識したことがある」と答えた人は、その学習を通してどのようなことを学んだり、感じたりしたか書いてください。

社会の授業では、平家物語だと平家物語が作られた頃の社会の様子だとか、どんなことが起ったのかという部分だけだったが、国語ではそれをきいていた人の気持ちだとかが命がけ、二人は時代だ、だから、二人は風に考えたりかききいた人々と合わせて考えることができた。

②ESDの視点に立った学習指導を通して、教科の見方に変化が見られた記載（複数生徒）

設問5 設問4で「意識したことがある」と答えた人は、その学習を通してどのようなことを学んだり、感じたりしたか書いてください。

社会科は他の教科とつながりがあるという事に興味を持ち知識を掘り下げていかなきゃ他の教科とつながるということ

教科ごとに切り分けて学習することもあるが、他教科との関連性を考えて、学習とあわせて、例えば、国語で古文の勉強をするとき、その時代の時代背景を知っていることで、理解が深くなり、その学習が深まると思う。

今、私たちが普通に生活していることは、なにげに学んでいる歴史や地理で学んでいることだということに気付くことができた。

6. 成果と課題

初年度は、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度のうち社会科で特に重視すべきものを3つにしぼるとともに、各分野で他教科との内容的なつながりのある教材や単元で、それらを身に付けさせる実践に取り組んできた。

2学年の実践である「江戸のエコ社会」は、歴史的分野の内容でありながらも、国語科や技術・家庭科で同様の教材または関連した内容を取り扱っており、各教科の既習事項を活かしたり、本時の授業で学んだことを他教科の学習に活かしていけるものであった。「なぜ、江戸時代がエコ社会の手本と



して注目されているのだろう」という問いに対して、生徒から、国語科や技術・家庭科で学んだことをもとにした予想が出され、江戸時代の人々のくらしや物事の見方や考え方に興味・関心を持たせることができた。また、そうした断片的な知識を関連付けたり、江戸時代のエコ社会の在り方を現代のそれと比較したりして、江戸時代の社会の在り方や人々の物事の見方・考え方をより深く理解することができた。つまり、他教科で身に付けた知識・技能を再構築して思考や理解を深めることができたことが、今年度の研究成果の1つであると考え。他教科とのつながりが極めて明確な教材や単元は数多いとはいえないが、各学年で2～3ほどは開発し、指導計画上に位置付けたい。

その一方、「江戸のエコ社会」の授業を通して、生徒たちは、今のエコに対する考え方や取り組みを変えていかなければならないという意欲を示すが、それがその場限りのものになってしまうという問題点もある。今後は、よりよい社会をつくっていかうとする意欲や態度を、どのように持続させ、どのように身近なことに置き換えて実践に移していくようにするかが課題である。

こうした課題を解決するためにも、教科間で内容的なつながりのある実践をした後、その学習を通して身に付けたことが、どの教科のどのような教材や単元、学習活動で活かされたかを、教科間で追跡調査する必要がある。また、生徒に対しては、この点をどのように捉えているのかを明らかにするためにアンケートを実施することも必要となる。そうすることで、教科間の内容的なつながりがより深く見えてくるとともに、E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力や態度をより定着させることができる。と考える。

身に付けさせるべき能力・態度での他教科とのつながりを見ると、社会科が重視している「多面的、総合的に考える力」を多くの教科で重視していることが分かる。今後も、「多面的・多角的に考察する」という社会科特有の思考について生徒へのさらなる定着を図り、他教科での活用を促す必要がある。「批判的に考える力」や「コミュニケーションを行う力」については、社会科の授業単独では取り組んでいるが、他教科との連携でこれらの能力を育成するまでには至っていない。次年度は、この点についても実践に取り組む必要がある。

E S Dの視点に立って教科間で連携した実践をしていくことは、中学校の教科指導における社会科の役割や位置付けを改めて考えるよい機会となった。前述した2年生での実践にある通り、「他教科で身に付けた知識・技能を再構築して思考や理解を深めたりすること」、そして「他教科に社会的事象の見方や考え方を提供し、他教科ではそれらを活用して教科の特質に応じた能力・態度を高めていくこと」が社会科の役割や位置付けとして見えてきた。この点も研究成果の1つである。

社会科には、「公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力」を育成することが求められているが、社会科単独ではその実現は難しい。今後は、国語科・英語科等と連携して学んだことを学校外の他者に発信したり、技術・家庭科等と連携して学んだことをもとに身近な生活を工夫したりするような実践が大切になってくると考える。